

明石の史跡（64）宇佐使と明石



文治元年（1185）12月6日、宇佐使（うさづかい）が都を出発した。使者は和氣相家である。彼は山陽道をひたすら西下して、8日ごろには、ここ明石に到着したところ、待ちかまえていた武士等によって、神宝（劔・神馬・五色絹）を、駅家に捨て置いたまま、京都に追い返されるという事件が発生した（『百鍊抄』『大日本史料4-1』19頁）。

宇佐使とは、「天皇即位のときと国家に異変あるとき宇佐八幡宮に奉告祈願の奉幣をするため派遣される勅使」といわれる（『国史大辞典2』）。

元暦2年（1185）3月24日におこなわれた、長門国赤間関の海上での合戦（壇ノ浦の戦）により、平氏は敗北（『吾妻鏡』）。先帝（安徳天皇＝8歳）をはじめ、二位尼（清盛室＝60歳）などが入水。義経は、捕虜となった建礼門院や前内府（平宗盛）をひきつれ入京するのが4月25日（『帝王編年記』）。

前政権担当者である平氏の滅亡という、重大な国家異変により、朝廷では、宇佐使派遣が、政治日程にのぼってきたのである。

片道20日余りの路程で、派遣された勅使は、畿内を通過し、播磨国明石に到着したときに、武士の狼藉に遭遇。使命を果たせないままに帰京する。

平氏政権の時代には、西は加古川左岸（加古川市加古川町）より、東は林崎（明石市林崎町）にいたる広大な地域は、五箇庄（ごかのしょう）といわれ、清盛の所領であった（『兵庫県の地名II』）。JR明石駅より東へ4キロ弱の距離にある山田川。その流域は山田荘と呼ばれ、「初音尋ねる山田御所」（『平家物語』）といわれた清盛の別荘が存在した。そこには清盛の分骨が埋葬され（『吾妻鏡』）、東西を清盛ゆかりの場所に挟まれた明石の治安は、良好であったろう。駅家で、狼藉を働く武士の姿を目撃した明石の人々は、武士の時代の到来を実感したものと思う。